

海水浴事始

「水に流す」という言葉は、外国語には翻訳しにくいでしょう。

日本では、古来、水浴によって身を清める習慣が広くみられました。たとえば、神役や神楽師、神輿みこし昇かきなどが役づとめをする前に、かつては川や池、海岸などで禊みそぎをしてから参詣することが多かったのです。つまり、水垢離みずごりをとる。あるいは潮垢離しおごりをとる。それで、厄災を払い身を清めた、とします。ここで、潮垢離に注目してみましよう。潮垢離は、平たくは潮浴しおあみともいいました。そこにはさまざまな解釈が成り立つでしょうが、まずは海に囲まれた島国で海水を神聖なものとする民族性を認めないわけにはいきません。日本では、ほかにも塩や塩湯・塩水による禊祓みそぎばらいの方法がさまざまに展開しています。大相撲での取組前に力士が塩で清める習俗は、よく知られるところです。

医療目的で海水を浴びる習慣も広くみられました。それが、やがて医療とレクリエーションをかねた海水浴へと発展していきます。そもそも海水浴は、明治以降日本を訪れた外国人がもちこんだ習慣です。もっとも古い記録は、明治五（一八七二）年に、フランスの法律家ブスケが片瀬海岸（神奈川県）で海水浴をした、と伝わります（ブスケ『日本見聞記』）。

海水浴場がはじめて設置されたのは、大磯海岸（神奈川県）で、明治一八（一八八五）年のこと。これも陸軍軍医の肝いりだった、といえます。以後、各地に海水浴場が普及していきました。が、当初の海水浴は、あくまでも潮浴であって水泳ではありませんでした。

明治末期から大正にかけて、江ノ島や逗子、鎌倉あたりに海水浴場が開かれました。これを、当初は水練場と呼びました。そこには小屋がけの水泳場が並んでいました。

ちなみに、日本では、水^ナ府^い流^ふ・笹沼流・向

井流・神伝流・小堀流などの泳法流派を生んでおり、これは世界でも特異なことといえるでしょう。あくまでも、精神性を重んじた鍛錬に位置づけられます。海水浴の事始はそこ
にあり、です。